

2010-2011年度教研研究テーマ

イエスの生き方に倣う
キリスト教学校
—これから同盟100年に向けて—

キリスト教学校教育

10

<http://www.k-doumei.or.jp/> E-mail info@k-doumei.or.jp

キリスト教学校教育同盟
〒169-8509 東京都新宿区西早稲田2-3-18-72
電話 03(3203)0361
FAX 03(3203)0362
理事長 野本 真也
編集人 鈴木 聰
額面200円(加盟店の購読料は会員に含まれています)
(毎月1回15日発行)



11月12日(土) 香蘭女学校で

主題

東日本大震災から何を学ぶか

—リスク・マネジメントを中心に—



齋藤誠氏

第53回学校代表者協議会
会は、来る11月12日(土)午前10時から午後4時30分まで、学校法人香蘭女学校(番町6-22-21)において開催される。

今後の主題は「東日本大震災から何を学ぶか」の分団協議では大学・中高・小学校に分かれて、大震災と原発事故への対応をはじめ、リスク・マネジメントを中心として、齋藤誠氏(東北学院大学副学長)が「東日本大震災と東北

。

緊急の重要課題に直面している学校代表者が共に

安が高まっている現在、

天災と人災が続ぎ、不

運をはじめて、リスク管

理・危機対応に関わる諸問題について協議する。

天災と共に祈り、知恵を出し合い、キリスト教

な使命を担う決意を改め確認しあつたためにも、

香蘭女学校

持つ方々の一人でも多く

の参加を願っている。

学園大学の対応」と題し

て主題講演を行い、午後

3時間で、各法人都

申込締切は10月20日。

用紙を送付済みである。

各法人宛に案内書と申込

書類が間違つて

いました。お詫びして訂正します。

「齋」の漢字が間違つて

います。

第3回事務職員部会研修会

主題講演

祈りと協働

閔西學院初等部部長、同盟
教職員後繼者養成部會委員長
磯貝曉成



レポート

西南学院宗教局·大学宗教部
同盟教研事務職員部会委員 篠田裕俊

レポート

キリスト教学校教育同盟主催第3回事務職員研修会・横浜・フェリス女子学院由修会（1）が、8月26日開催された。今回の研修会は、在職15年以前の中堅事務職員を対象として初めて開催された研修会で、全国の27法人47名の参加者によって行われた。

学校の使命を再確認して、共に働くことの意義を学ぶ事を目的とした研修であると話された。また今回の研修会の実行委員が紹介された。
主講講演は、磯貝聰成関西学院初等部長より「キリスト教学校に働く事務職員の祈りと励勵—建学の精神の継承—」と題して行われた。先生の

か。について研修会前提出し、他の参加者の事前課題の質問・意見も考慮してから研修会に参加していたので、質問や意見交換が活発に行われ各グループとも予定の時間ではなく不足する程度であった。

金体会は、各グループで話合われたことの紹介とそれに対する質問が行われたが、これでも必ず各グループに対する質問が

9月3日、玉川聖院で今年度第1回の教研会が開催された。風が襲来するなど開催で三時間と限られた時間ではあるが、中央委員会が開催された。

・中央委員会 学院で開催

災の現実を受け入れ、基督教におけるキリスト教の歩みを50年ぶりに分けて回顧した。上で、キリスト教によって来る世に対する希望を、それに基づきの世界に対する愛に生きるに、聖書に基づき共にいこう」とを前面にせよ。

は、クリスチヤンではないかは関係なく、学校が大切にしていくべき精神を継承していくべき人こそが、建築家だと話された。

昼食後、主題講義を行った。五つのグループに分かれ、話し合いが行われた。参加者は、事前課題として、①学校の創立の意図、②「建學の精神」の扱い所とならない趣旨、③今後のよきに「建學の精神」を継承していくことについて、ナオト・タカシ

火を覺えたる連夜、奉公金全員で行つた後、研修会を行なう機員の祝儀もつて研修会終了した。今回の研修会は、中堅職員対象にした初めての研修会といふこともあり、事前準備会を新規開催し、参加者も専門性の異なるなど、これまでの研修会とは違った研修会となつたが、中堅職員として学校の歴史・創立の意図を再確認し、研究精神を継続するにはどうしたら良いかを参加全員で共有できた大変意義深い研修会であった。

準備のるが、深く関連するもの催した。本大震災の現象を凝視しつつ、其に苦しみ共に生きる教育的問題を抱うて支えを今、わる諸学校のよろづい共同と共生の可能性を探めていく課題をも突きつけるからである。

5. 「イエスの十字架の死」で終わらない、「エヌスの復活の希望」を示す。この学校は何を大切にして運営されてきたのかを考える機会がある。でも良いはずです。そこを失はず（「コリント後書4章8節」）に自身の働く場やどうかあるはずです。

人の可能性に挑む教育 聖坂養護学校



学習発表会

聖坂教育は、知的障碍のある子ども達の教育である。教育の中でも特別に配慮された最先端の教育として紹介したい。子ども達の個性は比類無き多様さを示す。通常教育は、集団で行われているが本来は個々に行われるべきものである。本校では個々に教育計画を立て無限の可能性を求めて実践を積む。

知的障礙児の成長発達は大変にゆっくりである。顕微鏡や望遠鏡が私達の視力の限界を広げた様に聖坂の子ども達は教育に対する新しい視座を与えてくれる。人を育てることの本質と豊かさを日々実感させられる。

本校は、近隣の公立小学校、私立小・中・高等学校と交流学習をしている。聖坂の子ども達に触れた彼らは、友達を思い遣る心や相手に配慮する優しさを学ぶ。人権や道徳は教科書では教えられない。コミュニケーションもままならない配慮の必要な仲間に出会って優しさの意味を実感する。

本校には、介護体験の学生や学習ボランティアが来る。特別支援教育に触れ人生観や教育観の変わった学生は少なくない。久里浜に特別支援教育研究所がある。全国から専門性を高めるために中堅の教師が集う。本校にも実地研修で来校する。のびのびと学ぶ子どもたちと寄り添って教え・導き・育む教師の姿勢を見る。

教育が大きく歪められてしまった今日、本物の教育に共感し、指さで欲しいと願う。

松井 肇／聖母善説堂校長

わが校の

ウニボイントアビリ

「学而事人」(学びて人に仕える)

90年の歩み、受け継がれる精神

桜美林学園

桜美林学園の歴史は90年前に溯ることが出来ます。

この起源から流れ出た教育理念は、一世紀近くを経た今も、学園の建学の精神として桜美林幼稚園、中学高校、そして大学に集う約1万1000人に及ぶ若いのちを育んでいることをご紹介しようと思います。

学園創設者の清水安三は、滋賀県に生まれ、青春時代にメリル・ヴォーリスと出会い、彼の影響でキリスト者となり、同志社神学部へ進学しました。同志社を卒業後、1917年、日本組合基督教会から日本人初の宣教師となって中国東北部の瀋陽へ派遣されました。当初は日本への伝道が中心でしたが、「中國の民衆のために中國土になる」覚悟を抱き、北京へ宣教の拠点を移した矢元、華北一部一帯を襲った未曾有の旱魃に遭遇しました。安三は妻美穂と共に直ちに被災児童施設を北京朝陽門外に立ちあげ、華北一帯の村落を巡り、飢餓に苦しむ799名の子どもたちを収容し、救済に奔走するのでした。翌年は収穫が見込まれたので、子どもたちを実家へと送り届けますが、収容期間中、朝陽門外付近一帯のスラムに住む若い女性たちの悲惨な状況に接し、性差別の犠牲となっている彼女たちを救うには、キリスト教信仰に立つて教育が必要だと痛感、無償の学校「崇貞女学校」(後に「崇貞学園」と改称)を設立するのでした。識字能力和手芸技術を身につけ、自立した女性として自由な人生を歩む、そして女性の育成を念頭に置いた学校だとのことです。それは今から丁度90年前の1921年5月28日のことでした。桜美林学園はこの時を学園創立時と定め、清水安三が生涯において実践した「学而事人」、即ち「学びて人に仕える」の教えを、学園の拠って立つ基盤として今も大切に受け継いでいます。

三谷高康 <桜美林学園宗務部長>



禮拜風雲

建学の精神

八代學院

「」の学校はそんなに立派な学校である
か? ものの点について私は、ここに「」
精神が存在しておる申し上げたい。即ち
教える者も、また学ぶ者も、共に
一つの理解の場所があるであつて、一言
申しますと、「ねらひあるのなし」と
いふのであります。院長も校長も恐れる必
然を感じておる。職員一同おもひこころ
が、上もなく、下もなく、おじいには
間違に恐れるものはないといつてある
が故だ。

敗を懲すただ一つの妙薬は、人間を忘れず、神を畏れる心、神への畏敬の精神を持つことのみであります。

いわゆる教育の場におきましては、「この神への畏敬に基いた人間の交わりが、最も大切であります。」これを欠きませ時は、学校は学校でなくなり、教育が眞の教育の場でなくなるのですあります。

私ははじめ教育をいたします側にある者が、「こゝに」が身を顧みまして反対いたしまして、「ほんとうに教育をする資格があるるか」という間にござなまれるのであります。私たちがその役割を果たしますついでに、生徒諸君の前に立ち、御父兄の前に立ちまして、いろいろのことをお話ししますけれども、それは決して私たちが皆でなんよりも偉いからだというわけでははないのであります。

そのことを肝に銘じて知り、この清いか



八代学院チャペル



六甲アイランドに建つ
神戸国際大学全量

創立者八代斌助の式辞抜粋
(1963年4月9日 第1回入学式での
八代 智
八代学院院長)

(6面よりつづく)
徒であった立場になつて、心理テストに回答した。私自身に関して言えば、多くの部分で當時の自分の性質と一致しており、他の先生方も同じような結果があつたと思う。しかし、ここに心理テストにおける落とした穴が潜んでいる。多くの場合、心理テストに求めているのは「結果の整合性」である。そこで、整合性があれば生徒の実態を確認して安心し、矛盾点があれば心理テストの限界というレッテルを貼つて終わってしまう。むしろ、鈴木氏が力説していくべきだったことは、矛盾点ださつたことは、矛盾点の背後には生徒のどんぐらな実態があるのが、全体的・総合的に結果を見たときに生徒は何を訴えているのかを読み取ることである。そのためには、
普段から生徒ときちんと向き合つ必要がある。それがなければ、心理テストも一枚の紙切れでもなり、まったく生まれた道ではない。心理テストによってこの側面と、自己理解という側面で歪んでしまうのではないかと思われる。また、木下氏には「W.I.S.C.-III」というIQを測定する心理テストについて説明しているだけであつた。生徒が個人的「W.I.S.C.-III」の受診結果を学校に提出していく場合があるのであるので、それがどのようないかで、それをつかうかが問題となることは重要であると思ふ。大概的には言語理解マーク、知覚統合(P.O.)、注意記憶(P.M.)、処理速度(P.S.)の4つの観点に従つてテスト診断し、その結果が

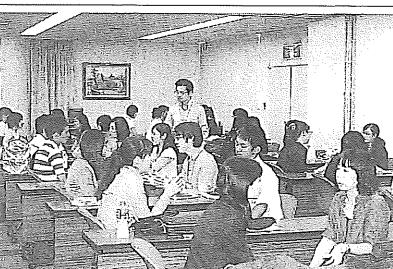
キリスト 教学校の 教師として

第53回新任教師研修会

関東地区

110

心理テストについて講演をしていただいたが、2人が共通して強調されたことは、心理テストを生かすには、その舌苔として深い生徒理解が欠かせないということである。この観点で、おもな
ことの重要性、心理テストと扱う者との深い理解と認識があれば、一手段として大いに役立つということを学んだ。中西由次（大阪女学院中学校・高等学校）



新任教師研修会

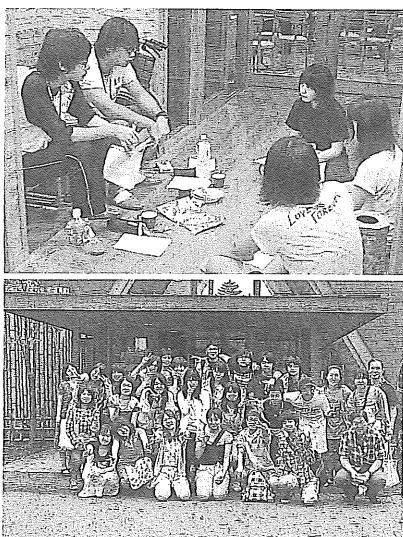


18 (جولان)

新任教師研修会
8月8日 遠く高知から
の清和学園の参加者も含
め66名の新任教師が芦ノ
湖畔「ホテル黒板アカデ
ミー」に集まつてきました。
（水口洋修会運営委員
長・玉川聖学院中高部
長）から大切なものは、
人から人に伝わることを
まず教えられ、50年を超
え綱々と継続されてい
るキリスト教学校教育
同盟の大切な伝承のわざ
である研修会が始まりま
した。アイヌアレイクの
時間を見て、最初は緊張
の面持たつた参加者が
士の距離が縮まり、自由
的になり、早くもならなか
る感覚ができていました。
夜は官房廳成先生（西脇
会員初等部部長）から
「教師になる上で大切な
こと」と「キリスト教
校で働く」と題した
話を伺いました。どの
校も目指すのは「確か
な学力」「豊かな心」を
う…。しかしながら、
子どもたちが一人で歩き
出した時、厳しい現実
境に遭遇します。そ
とも押し潰されない
逞しい心を養う「礼拝
のメッセージをキリスト
教学校は持っています。

Qとして数値化される。心理テストについて講義され IQはさらに言語化 IQ (V-I-Q) と動作性 IQ (P-I-Q) に分類される。例えば、木下氏がカウンセリングをしていてある生徒は、特異な言動が見られ、4つの観点のうち FDが極端に低かった。そこで P-I-Q のバランスもしくは、V-I-Q のバランスもしくは、どちらかで、からいろいろな解釈ができる。実際その傾向にそつて、人間的一面が浮かび上がるという事である。今回、大きく2種類の関東地区

合
うか。その先に希望を見
る何があつても生きて
いる。それを信じる心
を教えるのがキリスト教
ではないか、と先生
邦牧師（明治学院中學
校・東村山高等學校講
師）の問題提起「イエス
死の先にある復活・再生
を示されたキリストが実
現される未来があるので
すから」。
二日目前には、小田
中華先生（駿河園高等
學校教頭・山本實代子
先生（頌榮女子學院中學
校・高等学校教諭・内
田先生（國東東京院六
浦小學校教頭）の豈かな
経験からの発題を伺い
ながら、その三日間に感じ
た喜び語り合う幸運あり、ひ
とで満足する者あり、ひ
とで語り合つ幸運あり、
いふべき心を發揮して
遊び樂しいひとときを
過ごしました。夜は大橋
学校ではないか、と先生
は語られます。それで終
われば、十字架の
死のまことに仕え
る教師像「から、教師
とは得られない解決を求
めつつ、困難に向詫吟」
と題するものである。じき
に同いました。



株式会社
櫻井ワークキャン

「故郷」「浜千鳥」といつた歌をみんなで歌った。なかなかには涙する方々もおられた。思い出深い曲だったのである。

参加者たちも、その日のボランティアワークを終えた後、最後ミニーティングで、わから合いの時間を持つ。初日は元氣いが、失敗、不安をどう解消されるかという内心が中心だった。しかし二日目以降は、話をすることで個人の体験から生まれた想いや感想が参加者たちの口にのぼるようになつた。それは彼らのワークが、とりひどりに特有の「わたしの触れ合いの体験」となり始めたからだと言えるだらう。

最終日、四つのグループが体験発表を行つた。参加者の感想を聞いて感じるのは、四日前とは「別人」だということだ。ものごとを見る視点、感じ方がまったく新しくなっていることに気づかされる。生徒の感想に「この四日間を通して、わたしはそばにいるだけでも

